様々な人々が生きやすい社会のデザインを考える

アーティスト／東京藝術大学美術学部デザイン科准教授
クレードル社長
スプツニ子！

Essay 時の調べ

技術革新や経済成長が進む中、効率や利益がしばしば最優先される時代に、私たちは改めて問い直す必要がある。真に豊かな社会とは何か。それは、単なる経済的成功にとどまらず、多様な人々が安心して自分らしく生きられる場を提供できる社会ではないだろうか。

ここで鍵となるのが、「多様性を尊重し、公平性を確保し、包摂的な環境をつくる」という視点である。人々が互いの違いを受け入れ、公平に機会を得られる仕組みを構築するには、従来の枠組みを超えた創造的なアプローチが必要だ。これは理想論ではなく、未来の持続可能な社会を築くために避けて通れない現実の課題である。

例えば、職場におけるウェルビーイング支援の重要性がますます注目されている。社員一人ひとりの健康やメンタルヘルスに配慮し、多様化する価値観や背景を尊重することは、企業の持続可能性と競争力を高めるうえで欠かせない。日本の労働環境には依然として課題が多いが、こうした視点を取り入れることが、未来への大きな一歩となるだろう。

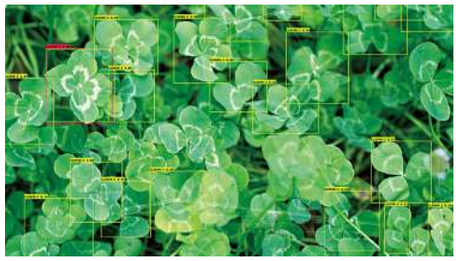
私が創業したクレードルは、こうした社会のニーズに応えるためのプラットフォームである。企業が従業員の健康と多様性を支援するためのサービスを提供し、これまでに60社以上、延べ80万人以上の社員に利用されてきた。特に女性の健康課題に焦点を当てた取り組みは、多くの企業から高い評価を受けている。例えば、生理痛や更年期障害といった見過ごされがちな健康問題に対し、企業と共に解決策を考え、具体的なサポートを提案している。

さらに、男性の更年期障害への支援も注目を集めている分野だ。これまでは見逃されがちだった男性のホルモンバランスや精神的な健康問題についても、クレードルは企業と協力して具体的な支援策を提供している。男性更年期障害は仕事のパフォーマンスや生活の質に大きな影響を与える可能性があるが、正しい理解とサポートを提供することで、個々の従業員の健康を守り、組織全体の生産性向上にもつながる。このような包括的なアプローチは、働く全ての人々の幸福を実現するために不可欠である。

これからの社会設計で目指すべきは、多様性を活かしながら誰もが輝ける仕組みを築くことである。技術の発展によって生じる格差をどう埋めるのか。全ての人が社会の中で役割を持ち、その存在が尊重される仕組みをどのように作るのか。これらの問いは、私がアーティストとして、そして起業家として、長年向き合ってきたテーマでもある。

未来は私たち自身の行動によって形づくられる。技術や経済の可能性を最大限に活用する一方で、人間の幸福や尊厳を見失わないこと。それこそが、次世代に受け継ぐべき「未来ビジョン」ではないだろうか。

2025年の新たな年を迎えた今、これらの課題に真正面から取り組む勇気を持とう。一人ひとりが自分自身の可能性を信じ、他者との共生を目指す社会を共に描く。それこそが、2040年を生きる全ての人々への最高の贈り物となるはずだ。



▲幸せの四葉のクローバーを探すドローン（2023年）
ゆっくり飛行するドローンがAI分析し四つ葉のクローバーを探す。最新技術で効率的に幸せの象徴であるクローバーを探して、本当に幸せなのかを問う映像作品

◀生理マシーン、タカシの場合。（2010年）
当時はタブーであった月経についての議論を促すコンセプトで卒業制作として作成した作品。マシーンを装着すると男性でも生理を体験できる

略歴
英国ロンドン大学インペリアル・カレッジ数学科および情報工学科を卒業後、英国王立芸術学院（RCA）デザイン・インタラクションズ専攻修士課程を修了。RCA在学中から、テクノロジーによって変化していく人間のあり方や社会を反映させた映像インスタレーション作品を制作。2013年からマサチューセッツ工科大学（MIT）メディアラボ 助教に就任し、Design Fiction Group を率いた。東京大学大学院特任准教授を経て現職